

平成 25 年度国立大学図書館協会地区協会助成事業報告書（東京地区）

申請地区名	東京地区（主担当大学：お茶の水女子大学）
事業名	職員企画研修「協働のススメ：つながる・つなげるライブラリアンを目指して」
事業目的・趣旨	<p>東京地区国立大学の職員により、以下のとおり研修を企画し、実施する。</p> <p>【背景と目的】</p> <p>学術情報の電子化やオープン化、教育・学習スタイルの変化、グローバル規模の競争の加速、大学への社会的要請の高まり等、大学を取り巻く状況は大きく変わりつつある。このように複雑化・多様化する環境の中においては、図書館においても、チームで働くこと、また図書館以外の人びとと協働して取り組むことが今後より重要となってくる。</p> <p>協働には、図書館間、他機関間などマクロな協働から、個々人どうしのミクロな協働まで、グラデーションがある。たとえば、教育・学習支援機能の向上を目指した、教員との協働。図書館サービスの高度化のための、学生との協働。研究支援機能を充実させるための学内各部署との協働や、大学そのもののアイデンティティ向上や教育研究成果の社会還元のための大学アーカイブ、博物館等との連携など、枚挙にいとまがない。</p> <p>しかしいずれにおいても、行動や思考様式、価値観の異なる他者とつながること、コミュニケーションをとることが必要不可欠となる。いかにしてよりよく協働していくか、大学図書館職員ひとりひとりが考え、経験し、経験からの学びを共有し、また振り返り、そして次の行動につなげていくことが必要である。</p> <p>このような問題意識を踏まえ、本事業では、協働できる職員となるきっかけを得られる場を作るため、以下のような研修を企画する。</p> <p>【研修趣旨】</p> <p>この研修では、理論・事例・体験の3方向から「協働」にアプローチし、実践に活かせるようになることを目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 理論編として、「コラボレーションを促す場のデザイン」について、レクチャーを通してその理論と方法を学ぶ。 ▪ 事例編として、各大学の協働の取り組み事例について、図書館外職員や教員など異なる立場の視点から話題提供を受け、共有する。 ▪ 体験編として、ワールドカフェ形式のワークショップを行い、参加者どうし、協働について学びあう。
事業内容	<p>【研修当日】</p> <p>実施日 平成 26 年 2 月 19 日（水）</p> <p>実施場所 お茶の水女子大学附属図書館キャリアカフェ</p> <p>研修参加者 26 名</p> <p>■概要</p> <p>10:00-10:15 開会</p> <p>10:15-11:15 レクチャー「コラボレーションを促す場のデザイン」（講師：安斎勇樹）</p> <p>11:15-11:35 話題提供①「mLa が魅せる大学の姿」（阿児雄之）</p> <p>11:35-11:55 話題提供②「教員と職員の協働、本当のところ。—千葉大学アカデミック・リンクで就職3年目の図書館員から見た場合—」（谷奈穂）</p>

	<p>11:55-12:50 休憩・昼食</p> <p>12:50-13:10 話題提供③「協働のベースとなるもの(仮題)」(伊達精也)</p> <p>13:10-13:30 話題提供④「LiSA が変えてゆく図書館の未来」(十枝菜穂子、小野寺咲紀)</p> <p>13:30-16:50 ワークショップ(監修・進行:和泉裕之・安齋勇樹・池田めぐみ)</p> <p>16:50-17:00 閉会</p> <p>■研修詳細</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レクチャー 東京大学大学院の安齋勇樹氏により「コラボレーションを促す場のデザイン」と題して、学習環境デザイン論にもとづき、タスクのデザイン、メンバーの関係性のデザイン、スペースとモノのデザイン、そして創造的な風土のデザインについて講演いただいた。レクチャー中には、コラボレーションが生まれやすい場、生まれにくい場について受講者が具体例を出しあいコメントしあうワークも行なわれた。 ・話題提供 東京工業大学博物館特任講師の阿児雄之氏、千葉大学アカデミック・リンク・センターの谷菜穂氏、東京海洋大学企画評価課の伊達精也氏、お茶の水女子大学学生の十枝菜穂子氏、小野寺咲紀氏から、大学図書館や大学職員の協働事例に関する話題提供が行われた。 ・ワークショップ 日本赤十字看護大学の和泉裕之氏、東京大学大学院の池田めぐみ氏の進行で、協働のイメージ、自分自身が経験した過去の協働事例、職場における協働の必要性、今後の職場での働き方などについて他の参加者と話し合う、ワールドカフェ形式のワークショップを行った。ワークショップの最後には明日からの決意を表明する「宣言シート」を記入し、実際の行動につなげていくことを目指した。 <p>【企画・準備】</p> <p>平成 25 年 9 月末に開催したキックオフミーティングの後、平成 26 年 2 月の研修当日まで、計 7 回のミーティングのほか SNS やメールリストでの打ち合わせを行った。またレクチャー及びワークショップ監修に安齋勇樹氏及び和泉裕之氏を迎え、ワークショップの内容や進め方等について詳細な打ち合わせを行った。</p> <p>また、平成 24 年度の研修企画委員会メンバーとも情報交換を行い、委員会の名称(コクダイマルケン)やロゴ、Facebook のページを引き継ぎ、継続的に使用できるようにした。</p>
事業の成果	<p>【研修当日】</p> <p>事業目的・趣旨において述べたとおり、この研修は、理論・事例・体験の 3 方向から「協働」にアプローチし、実践に活かせるようになることを目指したものであった。以下では、実施内容と、アンケート(参加者 31 名中 29 名回答)及び口頭での感想等にもとづき、この目的が達成されたことを示す。</p> <p>アンケートの詳細は、本報告書末尾に付した「アンケート分析結果」を参照されたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理論編(レクチャー) 理論編では、コラボレーションの場づくりに関する理論的背景や事例を学ぶこと、

また、研修後半のワークショップに受講者がスムーズに取り掛かれるための準備ができることを目指した。

アンケートによると、レクチャーの評価は「とてもよかった（評価4）」が100%であり、参加者の全員から高評価を得た。「協働も成功させる理論がちゃんとあるのだということ」「ワークショップに関するレクチャーは今後の企画のいいヒントになったこと」が印象に残ったという意見や、「協働／コラボレーションの場に大切なこと」「学習環境のデザインの要素と使い方」を学んだという意見など、レクチャーから様々なことを得たと考えられる。

・事例編（話題提供）

事例編では、教員、事務職員、図書館職員、学生など、多様な立場からの事例紹介を行った。

アンケートでは、「とてもよかった（評価4）」が83%、「よかった（評価3）」が17%で、あわせて100%であった。「LiSA」「LiSAのプログラムを通じて卒業生が実際図書館で働いている点」「LiSAと話し学生から見た図書館の話ができたこと」など、特にお茶の水女子大学附属図書館 LiSA からの話題提供が印象に残ったことがわかった。また、複数の話題提供者から指摘のあった「信頼関係が重要」という点についてアンケート中でもコメントされ、印象に残ったようだ。また、『学生協働』『教員協働』ばかりが協働ではなく職員同士の協働も重要であることが印象に残ったなど、多様な立場からの事例紹介を行ったことが、受講者の意識を変えるきっかけとなったと考えられる。

・体験編（ワークショップ）

体験編ではワールドカフェ形式のワークショップを通じて、協働について他の多くの参加者と対話を行い、自らの実践に活かしていくことを目指した。ワールドカフェの各セッションは進行するに従ってより深く、また実践に近づけて考えることができるように構成された。ワークショップの最後には、自らが実践したいことについて表明する「宣言シート」を記入し、研修で得られたもの・学んだことを実践に活かすことを促進できるようにした。

アンケートでは、「とてもよかった（評価4）」が76%、「よかった（評価3）」が24%で、あわせて100%であった。「きちんとデザインされたワークショップの充実感」「ワールドカフェでの話」「研修中に創発的コラボレーションが起こったこと」などが印象に残ったとする意見からは、ワークショップデザインが適切に行われていたことが確認できる。

また、「壁だと思っていたことを乗り越えている人がいて、そのコツを教えてもらったこと」や「他機関の方の話でとても参考になる部分があったこと」など、ワークショップ中に他の受講者との対話を通じて具体的な業務への示唆が得られたという意見もあった。

「ワークショップの運用方法のメソッドを実際に体験できたこと」が印象に残ったという感想も見られ、レクチャーに始まるこの研修全体が有機的に構成されていたことが受講者にも伝わったことが示唆される。

・まとめ

『協働』のあり方について、また図書館のあり方について考えが深まった」とい

うアンケートの回答からも示されるように、協働について考えることを通じて働き方を考え、図書館について考えることができる研修となった。またアンケートの問9の回答（「アンケート分析結果」参照）に示されるように、本研修で得たものを実際の業務に活かしていく決意が各受講者によってなされ、今後に期待できるものである。このように、本研修はその目標を一定程度達成したといえるが、各受講者が今後どのように実践に活かしていくかは現時点では判断できず、そちらこそが重要なことではないかと思われる。研修受講者のフォローアップについて、Facebook やメーリングリスト等を利用することも視野に入れつつ、今後検討したい。

【企画・準備】

企画のテーマや研修スタイルの検討、講師の選定など計画立案の業務から、講師依頼、広報、受講者募集、当日の運営などの企画実施業務、そしてそれらを支える多様な事務業務まで、一連の業務を経験した。日常業務の中では経験できない業務も多く、企画委員にとって貴重な経験となった。また特に委員のうち若手職員にとっては、自ら主導的に業務を進めていく経験は貴重なものとなった。

企画の進行、講師との調整においては Facebook グループを活用し、メールでのやりとりよりも迅速に進めることができた。広報や受講者募集、研修写真の公開にも Facebook 他のウェブサービスを活用し、業務の効率化と利便性の向上を図った。

講師はワークショップデザイン論に関する新進気鋭の若手研究者、安齋勇樹氏に依頼し、ワークショップは安齋氏及び和泉裕之氏とともに企画した。様々な意見交換や、事前のワークショップの試行などを通じてイメージを共有し、企画を実現することができた。

また、複数の大学から、教員・事務職員・図書館職員・学生と、立場の異なる5名の方に話題提供とワークショップへの参加をしていただき、ともすると図書館内で業務が完結しているように思われがちな図書館職員が多様な視点を獲得する絶好の機会になったのではないかと思われる。

企画委員が研修当日のワークショップにあまり参加できなかったという反省点もあるが、今後に生かしたい。

【成果のアウトプット】

本研修企画の成果を広く還元していけるように、企画プロセスや研修内容等についてまとめ、広く大学関係者と共有することを検討している。現時点で寄稿（投稿）を予定しているのは以下のとおりである。

- ・『大学図書館研究』（国公立大学図書館協力委員会）（メンバー6名全員の共著）
- ・『大学の図書館』（大学図書館問題研究会）（メンバーのうち2名による共著）

経費	講師謝金・交通費	92,980 円
	会議費	15,200 円
	雑費	21,820 円
	合計	130,000 円

国立大学図書館地区協会助成事業(東京地区成果報告)

JANUL
国立大学図書館協会

最終更新日は2014年3月26日です
ホーム
English
サイトマップ
更新履歴

メインメニュー

- 歴史
- 組織
- 事業
- 委員会
- メンバー
- 地区協会
 - 北海道地区
 - 東北地区
 - 関東甲信越地区
 - 東京地区
 - 東海北陸地区
 - 近畿地区
 - 中国四国地区
 - 九州地区
 - 北信越地区 (~H.19年度)
- 出版物等
- 関連資料集
- リンク集
- 過去のニュース
- 過去の資料

国立大学図書館地区協会助成事業(東京地区成果報告)

平成25年度成果報告:研修「協働のススメ:つながる・つなげるライブラリアンを目指して」

- 研修概要
 - 日程:平成26年2月19日(水)10時~17時
 - 場所:お茶の水女子大学附属図書館キャリアカフェ
 - プログラム[PDF]
- 研修資料

プログラム	タイトル	講師	資料
レクチャー	「コラボレーションを促す場のデザイン」	安斎勇樹(東京大学大学院学際情報学府博士課程)	資料 [PDF]
話題提供(1)	「mLaが魅せる大学の姿」	阿見雄之(東京工業大学博物館特任講師)	資料 [PDF]
話題提供(2)	「教員と職員の協働 本当のところ。—千葉大学アカデミック・リンクで就職3年目の図書館員から見た場合—」	谷奈穂(千葉大学附属図書館学術コンテンツ課)	資料 [PDF]
話題提供(3)	「協働のベースとなるもの」	伊達精也(東京海洋大学企画評価課企画係長)	資料 [PDF]
話題提供(4)	「LISAが変えてゆく図書館の未来」	十枝菜穂子、小野寺咲紀(お茶の水女子大学LISA)	資料 [PDF]

- ポスター[PDF]
- Facebookページ:コクダイマルケン

URL : <http://www.janul.jp/>

国立大学図書館協会 Web サイトの地区協会>東京地区に地区協会助成事業のページを作成していただきました。当日のプログラムや配布資料、ポスター等をアーカイブとして掲載し、情報共有できるようにしました。

平成 25 年度国立大学図書館協会地区協会助成事業（東京地区）
職員企画研修「協働のススメ：つながる・つなげるライブラリアンを目指して」
アンケート分析結果

開催日時 : 平成 26 年 2 月 19 日 (水) 10 : 00-17 : 00

開催地 : お茶の水女子大学附属図書館

受講者 : 26 名

話題提供者 : 5 名

参加者合計 : 31 名

目次

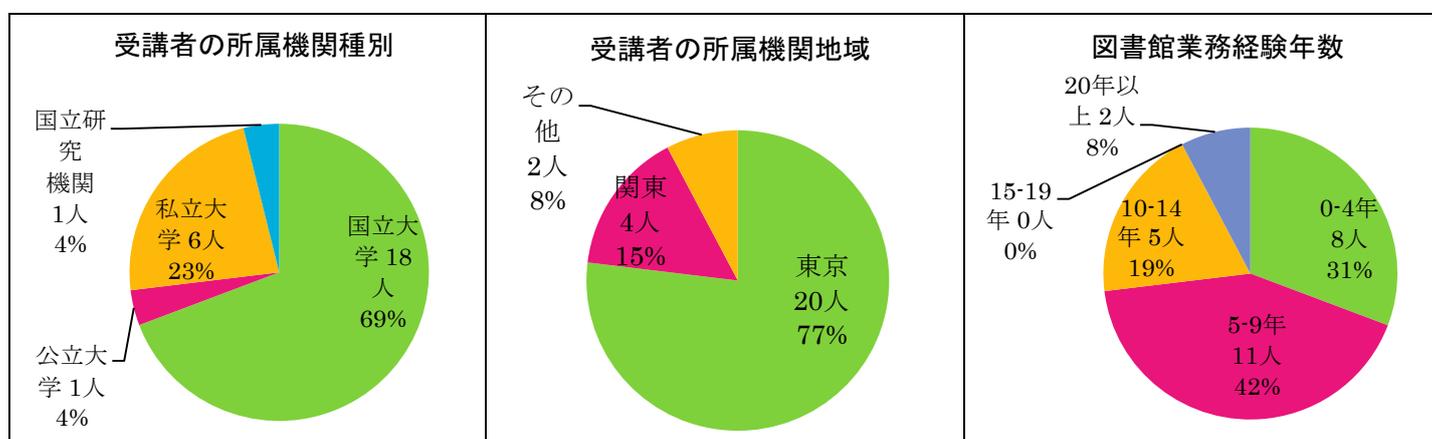
1	事前アンケート結果から.....	2
1.1	受講者の属性.....	2
1.2	職場を越えた協働経験の有無.....	2
2	事後アンケート結果から.....	4
2.1	広報.....	4
2.2	参加理由.....	5
2.3	テーマと各プログラムの満足度.....	7
2.4	内容全般、その他の満足度.....	8
2.5	研修の効果(1) 印象に残ったこと.....	9
2.6	研修の効果(2) 得たこと・学んだこと.....	11
2.7	研修の効果(3) 今後の仕事への展開.....	13
2.8	その他.....	15

1 事前アンケート結果から

対象者数 : 26名
有効回答数 : 26件
回答率 : 100%
回答方法 : 受講申し込み時にウェブフォームから回答

1.1 受講者の属性

- 主対象を国立大学図書館協会東京地区協会参加館の職員としたため、国立大学からの参加者及び東京地区からの参加者が多い。しかしながら、私立大学からの参加者も6名、公立大学や国立研究機関からの参加者も若干名いた。様々な立場からの情報交換が可能な場となったと考えられる。
- 図書館業務経験年数は、0～9年の者が70%を越え、若手職員が多く集まった。

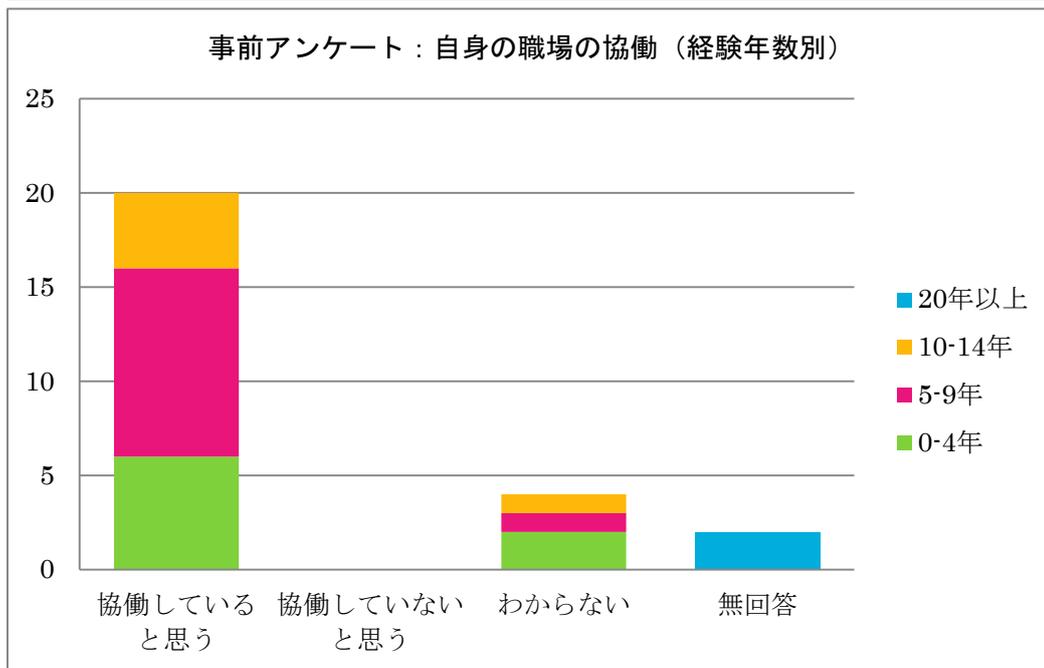
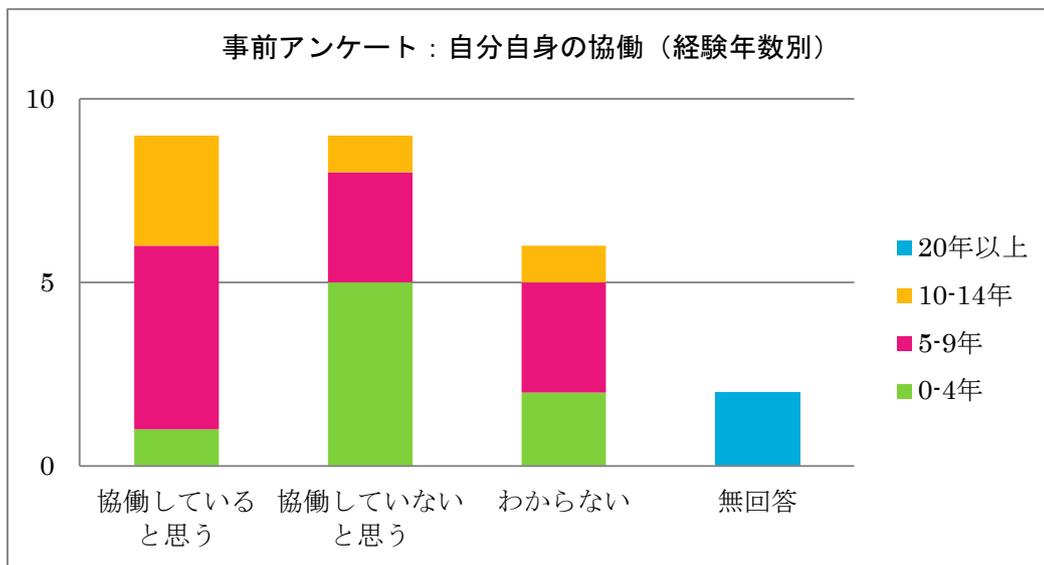


1.2 職場を越えた協働経験の有無

- 事前アンケートでは、以下の2点について質問した。その際、あえて「協働」という言葉の定義などに触れず、各自で判断して回答してもらうようにした。
 - 【自分自身の協働】あなたは職場を越えた協働をしていると思いますか。(過去の経験でも構いません)
 - 【自身の職場の協働】あなたの職場では、部署・係等を越えた協働をしていると思いますか。(過去の経験でも構いません)
- 自分自身が職場を越えた協働をしているかについては、「していると思う」と「していないと思う」が35%ずつ、「わからない」と「無回答」が合わせて31%と、大きく3つに分かれた。
- 一方、自身の職場での部署・係等を越えた協働については、「していると思う」が77%であり、「していないと思う」が0%、「わからない」と「無回答」が23%であった。
- 以上をまとめたものが、表1である。職場は協働しているが自分は協働をしていないと認識している参加者が少なくなく、自分が普段従事している業務では協働をしない、または協働を必要としない、と回答者が認識していると考えられる。
- また、図書館業務経験年数別にみると、経験年数が少ないほど自分自身が協働していると認識していないことがわかる。単純に業務経験が増えれば協働経験も増えるとも考えられるが、同時に、職場内での責任が増加するほど協働についての認識も高まる、と考えることもできるかもしれない。

表 1 事前アンケート：自分自身の協働と職場の協働

		自身の職場での部署・係等を越えた協働				総計	%
		協働している と思う	協働していな いと思う	わからない	無回答		
自分自身の 協働	協働していると思う	8	0	1	0	9	35%
	協働していないと 思う	8	0	1	0	9	35%
	わからない	4	0	2	0	6	23%
	無回答	0	0	0	2	2	8%
	総計	20	0	4	2	26	100%
	%	77%	0%	15%	8%	100%	



2 事後アンケート結果から

対象者数 : 31名

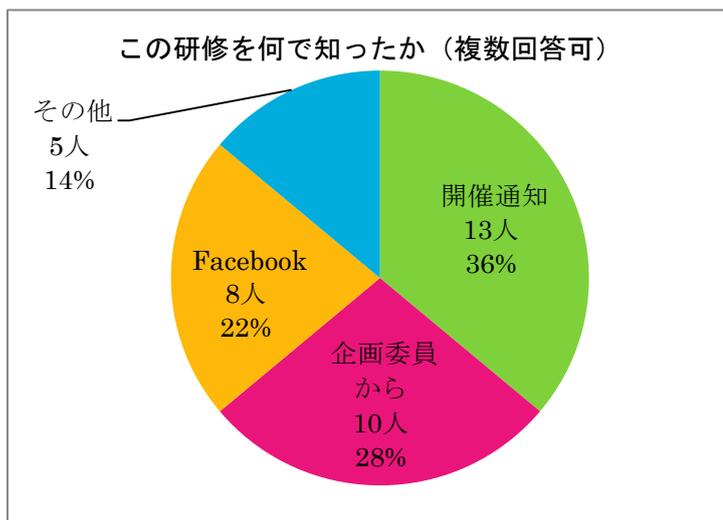
有効回答数 : 29件

回答率 : 94%

回答方法 : 配布した紙のアンケートに記入し、研修終了時に回収。記名式。

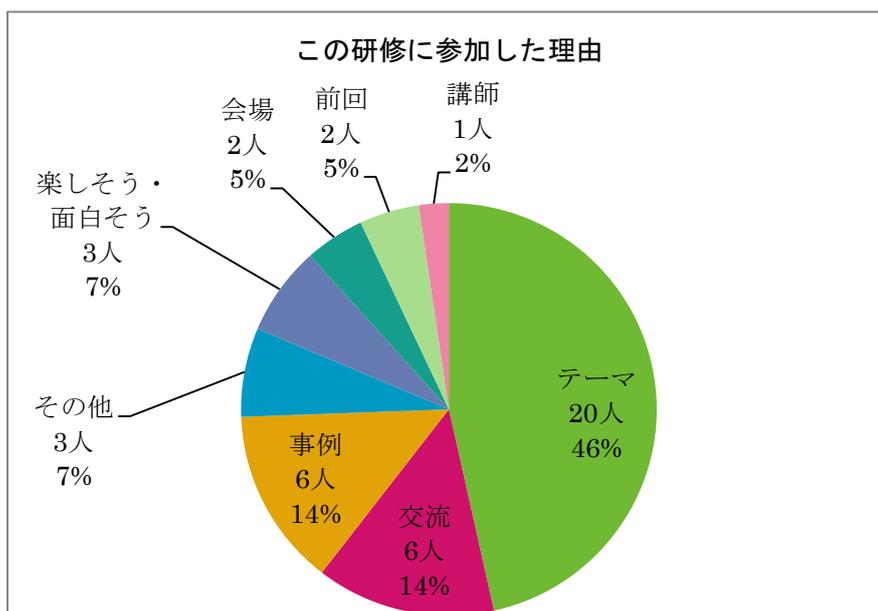
2.1 広報

- 開催通知（国立大学図書館協会メーリングリストを通じて各大学に配布）からが13人と最も多い。
- 企画委員から知った者も10人と少なくなく、「その他」の内訳は講師から・上司から・同僚からというものであることから、口コミで「おすすめ」することが受講者を集めるために重要であることがわかる。
- 一方、今回の研修では、ウェブでの広報はFacebookページに一本化して行ったが、全受講者の22%にあたる8人がFacebookを通じてこの研修のことを知っていることから、大学図書館職員に対する周知・広報においてFacebookを利用することには一定の効果があることがわかった。



2.2 参加理由

- 参加理由については、「参加しようと思った理由はなんですか」という問いに対して自由記述により回答を得た。自由記述の内容に対してキーワード等で分類、カウントした。（複数のキーワードがある場合は複数カウントした。）
- 半数近くがテーマを理由に挙げており、「協働」というテーマが受講者のニーズに即したものであったことがわかる。また、他機関からの参加者との交流や、多様な事例を知ることを理由とするものもそれぞれ6件ずつと多く、「いかにしてよりよく協働していくか、大学図書館職員ひとりひとりが考え、経験し、経験からの学びを共有し、また振り返り、そして次の行動につなげていくことが必要」という本研修企画の問題意識が適切に伝わっていたといえることができる。
- また、件数は少ないが、前回の研修（平成24年度国立大学図書館協会東京地区助成事業・職員企画による研修「図書館だけど、図書館じゃない、『未来の大学図書館』」を指すと考えられる）が参加理由のひとつとなったことは注目に値する。正式にシリーズとして開催しているわけではないものの、今年度の企画に際しては、平成24年度に考案されたロゴ、愛称などを継続して使用することにした。このことにより平成24年度企画との連続性が見えやすくなったのだと考えられる。前年度の研修もワークショップが中心の職員企画研修であり好評を得ていたが、そのことがリピート参加や同僚等へのおすすめにつながるということがわかったことから、このような形式での研修に一定のニーズがあることがわかる。

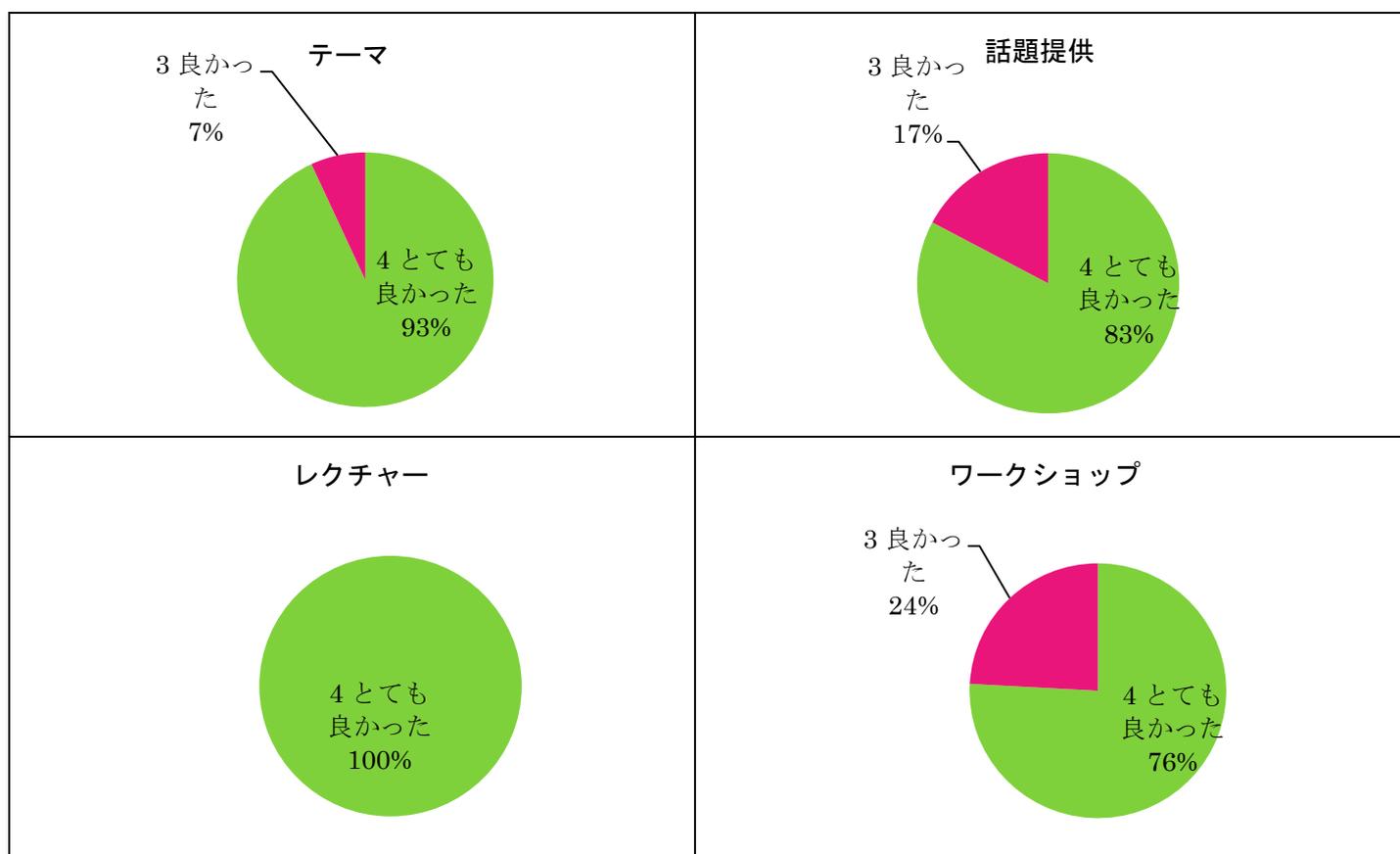


自由記述の内容
日帰りできる
「協働」の2文字に魅かれて
前回参加して非常に楽しかったから
他大学の方々との交流のため
いろんな協働の事例をきけるよい機会のため
ちょうど大学内の他部署との連携のむずかしさを痛感しているタイミングでしかも図書館主体の研修であり、ヒントが得られると思いました
テーマに興味があったから
学生協働のグループに参加しており「協働」という言葉が気になったため

協働に興味があった
他の図書館、大学の方の業務についてお話を伺える(交換できる)のが貴重だと思ったから
前回の研修に関わっていた方からすすめられた為
他の機関の方と交流の機会と思ったため
テーマが楽しそうだったから
協働に興味、関心があったため
興味のあるテーマだったから
県外、関東での情報を知りたかったから
学生協働のプロジェクトにかかわっているから
現状の職場に閉塞感と息苦しさを感じており、外部で新しい考えや視点に触れたかったため
他大学の協働例に興味があったため
「協働」というキーワードはまさに自分が最近考えていたテーマ(トピックスだったので
テーマに関心があった
企画内容が面白そうだったので
学習相談デスク(ラーニングコモンズ)、他部局の職員同士のコラボを推進したい
Facebook での告知がとても楽しそうだったので
図書館の方々の事を聞ける貴重な場と思ったので
声をかけて頂いて楽しそうだと思ったので
話題提供者として
他大学の図書館職員のお話を聞きたかったから(お話したかったから)
図書館員としての見解を深めたいと考えて
テーマ
協働について興味があったから
他大学の事例をききたかった
自館と異なる規模、構成員の機関での協働について知りたいと思ったからまたそれを今の職場で活かして考えているから
講師が魅力的だったから
協働について考える機会が欲しいと思ったから
協働に興味があったため
会場に惹かれた
また協働というものがよくわかっていないと思っていたため

2.3 テーマと各プログラムの満足度

- ▶ テーマと各プログラム（レクチャー、話題提供、ワークショップ）の満足度について、「とても良かった（4）」「良かった（3）」「悪かった（2）」「とても悪かった（1）」の4点尺度で回答してもらった。
- ▶ すべての項目で、以下のように「とても良かった（4）」「良かった（3）」の合計がいずれも100%となり、「悪かった（2）」「とても悪かった（1）」という回答はなかった。満足度は非常に高かったといえる。
- ▶ 特に、レクチャーについてはすべての回答者が「とても良かった（4）」と回答し、講師選定や内容などが妥当であったことがわかる。
- ▶ 一方、ワークショップについては、76%が「とても良かった（4）」と回答、24%が「良かった（3）」と回答しており、「とても良かった（4）」の割合が他のプログラムと比較してやや低い。このことについて、事後に口頭で幾人かの受講者から得た感想にもとづけば、時間が長く受講者に負担がかかったこと、他人と話をしている時間が多く、自分ひとりで考える時間を設けず消化不良になったこと、などがひとつの原因ではないかと考えられる。時間の長さについては、ワークショップ中の時間配分について事前に受講者に知らせていなかったため、休憩時間や、セッションごとの時間配分などをあらかじめ伝え、受講者が心づもりできるようにしておくことが重要ではないかと考えられる。また、研修は、そのプログラムが終了したら終わりということではなく、その後職場に戻って、研修で学んだこと、他の受講者から聞いたことなどを咀嚼しなおし実践につなげることが重要だろう。その意味では、ワークショップ中に自分ひとりで考える時間がなく消化不良になったといっても、その後職場に戻ってからの内省が十分にできればよいのではないかと考えられる。



2.4 内容全般、その他の満足度

- 内容全般について、期待通りであったかどうかについて「とても期待通り (4)」「期待通り (3)」「期待と違う (2)」「期待とまったく違う (1)」の4点尺度で回答してもらった。その結果、「とても期待通り (4)」「期待通り (3)」をあわせて96%の回答が得られた。また、「期待とまったく違う (1)」と回答したものが1人いるが、その理由は「良い意味で、期待を裏切ってくれた」というものであった。自由記述欄には、「内容がほぼわからないまま参加した」「あまり予想していなかった」などの回答も見られた。事前に研修の内容があまり伝わっていなかった可能性があり、受講者募集時の内容を見直す必要があるかもしれない
- 開催時期、時間数・日数については、「とても適切 (4)」「適切 (3)」「適切ではない (2)」「まったく適切ではない (1)」の4点尺度で回答してもらった。
- 開催時期については97%が「とても適切 (4)」「適切 (3)」と回答したが、大雪後の開催で天候が心配であったという意見や、土曜日に開催してほしいという意見が見られた。
- 時間数・日数については「とても適切 (4)」「適切 (3)」があわせて100%となり、妥当であったと思われる。

<p style="text-align: center;">内容</p> <p>1 期待とまったく違う 3%</p> <p>2 期待と違う 4%</p> <p>3 期待通り 14%</p> <p>4 とても期待通り 79%</p>	<p>自由記述欄 (末尾の括弧内は選択した回答番号)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 期待以上 (4) ▪ 期待以上です (4) ▪ 内容がほぼわからないまま参加したので (3) ▪ 良い意味で、期待を裏切ってくれたので (1) ▪ あまり予想していなかったです (2.5) (グラフでは2で集計)
<p style="text-align: center;">開催時期</p> <p>2 適切ではない 3%</p> <p>3 適切 38%</p> <p>4 とても適切 59%</p>	<p style="text-align: center;">時間数・日数</p> <p>3 適切 14%</p> <p>4 とても適切 86%</p>
<p>自由記述欄 (末尾の括弧内は選択した回答番号)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 雪の心配があったので (3) ▪ 土曜などの開催ができれば有り難いです (2) 	

2.5 研修の効果(1) 印象に残ったこと

- 「この研修で特に印象に残ったことは何ですか」という問いに対する自由記述による回答について、以下の傾向が見られた。
- 一般的に、レクチャー（コラボレーションの理論）、ワークショップ（コラボレーションの実践）、話題提供（コラボレーションの事例）それぞれについて、印象に残ったことがあるという回答であり、本研修の目的（理論・事例・体験の3方向から「協働」にアプローチし、実践に活かせるようになること）は一定程度果たされていることが確認できた。

回答の傾向	考察
テーマ、レクチャー、話題提供、ワークショップそれぞれについて印象深い部分があったという回答だった。	一つの事項ばかり印象が残るといったような偏りが無く良かったのではないかな。
学生側である LiSA についても印象深いという回答が複数あった。	ワークショップにも LiSA のお二人に参加いただき、直接意見が聞けたということは受講者にとって良かったと思われる。
協働が様々な場面で起こりうること、自分が今まで協働だと思っていたいなかったことも協働であったことに気付いたという回答が多数あった。	協働の多様性を認識したことにより、様々な協働の形をイメージしやすくなり、受講者が協働を進めやすくなったのではないかな。
協働には「適切な分担」、「信頼関係」、「相手を知り、自分を知って貰うことが重要」など、協働の理論やよりよい協働のコツに関する回答が多数あった。	レクチャーや事例報告の内容が適切であったと思われる。
「研修中に創発的コラボレーションが起きたこと」、「ワークショップの運用方法のメソッドを実際に体験できたこと」、「たくさんの人と話す機会があったこと」など、ワークショップに関する回答が多数あった。	ワールドカフェで実際に「協働」を体験でき、受講者が今後協働に取り組む上で、この経験が役に立つのではないだろうか
図書館業務経験年数別の回答傾向と考察	
経験年数 0-4 年目の参加者：協働の多様性を認識できたことという回答が多い。	協働を実務で経験していない人が多いため、協働に様々なパターンがあることを認識できたことが最も印象深かったのではないかな。
経験年数 5-9 年、10-14 年の参加者：ワークショップが印象深かったという回答が多い。	協働を経験している人が多いため、自身のアウトプットができ、他の事例から多数のヒントを得られるワールドカフェの手法が効果的だったと思われる。

この研修で特に印象に残ったこと(自由記述)
参加者の明るさ
きちんとデザインされたワークショップの充実感
企画委員のホスピタリティ
図書館員という枠組みで研修がなされていること
LiSA
似たような悩みをもっているということ
1つの目標に向けて違った価値観を持つ人が協働することの難しさ、楽しさ
ジグソーパズル

自ら動く、自分の心が動かされるような協働を
参加者の協働や図書館に対する意識の深さ
講師の方が楽しそうにわかりやすく話していたこと
「信頼」という言葉、協働は信頼がベースにあるという点
自分の考え、意見を聞かれる機会が多くそのたびに周りの方の意見を聞けたこと
できることから始める人がいっぱいいること
LiSA のプログラムを通じて卒業生が実際図書館で働いている点
ワークショップの運用方法のメソッドを実際に体験できたこと
協働も成功させる理論がちゃんとあるのだということ
協働という言葉のとらえ方が人や局面によって違うこと
「協働しよう」と言って始めるものとは限らないこと
「学生協働」「教員協働」ばかりが協働ではなく職員同士の協働も重要であること
協働は何かハレのイベント時だけでなく、日常の中でどこでも行う機会があること
適切な分担が良い協働を生むということ
大学内の他部署とのやり取りでお互いの業務を理解し協働するのが難しいと他の人も思っていること
「協働」が嫌でも必要になることがあるという他の参加者の言葉
安齋さんのレクチャーでのレゴの話
ワールドカフェの最後の他の人の「宣言」
ワールドカフェでの話
「協働」にもいろいろなレベルがあり個人レベルでの信頼関係構築が重要。相手をよく知り自分も知ってもらう努力も必要なのだということ
手法を用いて、図書館の外から学ぶことも必要であること
協働は目的ではなく手段であること
1つの解にまともなくても良いワーク形式
他大学の協働プロジェクトにおける問題点、共通点
ワークショップに関するレクチャーは今後の企画のいいヒントになったこと
ワークショップの間に話げできたことでのいろいろな気づき
協働は Give & Take であるという発想
研修中に創発的コラボレーションが起きたこと
LiSA と話し学生から見た図書館の話ができたこと
たくさんの人と話げできたこと

2.6 研修の効果(2) 得たこと・学んだこと

- 「この研修であなたは何を得ましたか」という問いに対する自由記述による回答について、以下のような傾向が見られた。
- 本研修のテーマである「協働について学んだ」といった回答が最も多かった。
- その他の回答としては、信頼が大切であることを学んだ、他機関の話を聞いて参考になったり、モチベーションにつながったりしたという回答がみられた。また、レクチャーの中に学習環境デザインの話があったためか、環境づくりに言及している回答もみられた。
- また、事前アンケートで質問した「あなたは職場を越えた協働をしていますか」（自分自身の協働経験）と「あなたの職場では、部署・係等を越えた協働をしていますか」（職場の協働経験）への回答内容と事後アンケートの「得たこと・学んだこと」を比較すると、以下のような傾向が見られた。

		事前アンケートの回答内容		
		「していると思う」	「していないと思う」	「わからない」
事前アンケートの項目	自分自身の協働経験	「協働について学んだ」(4)の次に「話を聞いて参考になった」「(自分の)取り組み」(各2)が多く見られた	「協働」(5)の次に「信頼」「コミュニケーション」(各2)多く見られた	「協働」(3)の次に「環境づくり」(2)が多く見られた
	職場の協働経験	「協働」(9)の次に「信頼」「意識する」「(自分の)取り組み」(各3)が多く見られた	該当者なし	「協働」(3)のほか、「信頼」「気づき」「環境づくり」(各1)が挙げられた

- 自分は協働をしていないと認識している受講者からは、本研修から協働における信頼関係やコミュニケーションの大切さを学んだといった回答がみられたが、自分は協働していると認識している受講者からは、他機関の話す機会を持ち、話をきいたことで参考になったという回答が目立った。
- 職場の協働については、ほとんどの受講者が自身の職場では協働していると認識しているが、協働のほかに、信頼することの重要性などに言及している回答が多かった。
- 自分自身や職場での協働経験によって、得たこと・学んだことには違いがあり、それぞれの経験に応じた学びがあったことが伺える。

この研修で得たこと・学んだこと(学びましたか)(自由記述)
皆さん色々な観点から色々と考えていることがわかりうまくいっていること、そうでないことも含めて地道に努力されている方の話を聞いて明日から前向きに業務に取り組んでいけそう
図書館という専門性と公共性
仲間
他大学の人と話す楽しさ
「協働」が大事なのではなくそこから何を生み出していくかが重要であること
「働く」ということの具体的なイメージを少しだけ持てた
「協働」するには信頼が必要、人は同等であるという意識をもって協働するということ
普段の何気ないコミュニケーションが大事であり、そこから信頼がうまれるということ
「協働」のベースが信頼関係であることと「協働」そのものについて考えるよい機会だった
「協働」するために仕事を変えるのではなく、仕事の質を上げるために協働するということ
壁だと思っていたことを乗り越えている人がいて、そのコツを教えてもらったこと
視点が異なったり利益が相反する立場の相手と対話を成立させるための手法(の基礎と考え方)
「協働」も色々な角度からのとらえ方があり、何を目的にするかどの視点から考えるのかで方法が違うこと
意外と「協働」していたかもしれないこと(協働の広さ)に気付けたこと

「協働」と仰々しくしていなくても些細な協力をして信頼関係を積み重ねていくことの重要性
他の機関の人がどのような課題を抱えながら働いているか
協働／コラボレーションの場に大切なこと
自分の業務や取り組みを見直そうというモチベーション
「協働」というと図書館とそれ以外のものと考えていたが図書館内の係間での「協働」が行われてるということ
他機関の方の話でとても参考になる部分があったこと
「協働」の形、考え方も様々にあること
自分自身の仕事の取り組み方
「協働」という言葉に敷居の高さを感じずできることから始めればよいということ
誰かと一緒に仕事をすることがすでに協働であり、そこから自分がいかにいい形で広げていくか、コラボレーションしやすい環境を作っているか、これから消化し理解を深めたい
人と人のつながりの大切さと特定の人が居なくなっても外に対するパフォーマンスを落とさないように、協働が途切れないように組織同士のつながりを途切れさせないということの問題の気づき
「協働」のあり方について、また図書館のあり方について考えが深まった
問題意識が明確になった。他大学の状況、事例を聞け、今後の具体的な実践のために参考になった
見失いかけていた初心を思い出した
学習環境のデザインの要素と使い方
考える続けるモチベーション
1つの物事の見方は人によって違うということ、発想と裏で持っている考えは様々でありそれを語り、語ってもらうことの重要性

2.7 研修の効果(3) 今後の仕事への展開

- 「研修で得たものを今後の仕事にどのように取り入れますか」という問いに対する自由記述による回答について、以下のような傾向が見られた。
- 本研修の目的は、「理論・事例・体験の3方向から「協働」にアプローチし、実践に活かせるようになること」であるから、今後の仕事への展開意欲は重要な項目である。全体として少しずつできることから積み上げていきたい、という趣旨の回答が多く見られた。事前アンケート結果では、あえてアンケート中で「協働」の定義を示さなかったため、自分自身が協働をしていないと回答する者は少なからずいた。しかし、この研修を通し、実際には協働をしていたこと、あるいはその可能性があったことに気づいたと考えられる。そして、業務上の「常識」や自身の価値観などにとらわれすぎず、オープンな姿勢で他者とともに仕事を進めていこうという思いを新たにしたいと考えられる。
- 個別の内容を見ていくと、全般的に、コミュニケーションの大事さを実感したという趣旨の回答が多い。特に「信頼関係」という言葉が多く使われている。また、自分の視野を広げていくこと、他者を理解していくことに関する内容のものが多く。
- どのように仕事に取り入れるかについては、すこしずつ、一歩ずつ、無理はしない等、できることから始めていきたいという気持ちを感じられる。
- 「協働」に関して受講者それぞれが考え、何かを得たという回答が多くみられ、それぞれがワークショップを通して、普段からのコミュニケーションの大切さ、視野を広げることの重要性を感じたと考えられる。
- 業務経験年数別にみた回答傾向は以下のとおりである。

回答の傾向	考察
業務経験年数 0-4 年の受講者は、この研修で得たものを、自分自身の業務への理解を深め日常業務をしっかりと行ったり、オープンに他部署の人々と関わっていたりしたいという趣旨の回答が目立った。	事前アンケートによれば、実際に自分自身が協働を行った経験がないと認識している受講者が多い。この研修を通して、身近なところで協働をしていること、する可能性があることに気づくことができたのではないかとと思われる。
業務経験年数 5-9 年の受講者は、「できる範囲で」行いたいという回答が中心となった。	事前アンケートによれば、約半数が実際に自分自身で協働を経験している。この年代は、業務経験をある程度積んではいるが、まだ係長など責任ある立場には立っていないと思われるため、周囲に積極的に働きかけるより、自分のできることを行っていきたいという内容が中心となったのではないかとと思われる。
業務経験 10 年以上の受講者は、研修で得たものを積極的に仕事に取り入れる姿勢と、職場全体に活かそうという傾向が見受けられた。	責任ある立場にある者も多いため、職場全体の視点を持っている場合が多いのだと思われる。この年代の受講者は割合としては少なかったが、それだけにこの年代の受講者は意欲が高く、積極的に研修で得た者を活かしたいという動機がそもそも高いのではないだろうかと考えられる。

研修で得たものを、今後の仕事にどのように取り入れるか(自由記述)
図書館をもっと活性化することを考えたい
学生の協働の構築に活かしたい
他の人ももっとうまくやりたい、楽しくやりたいという希望をそれぞれ持っていることが分かったのでそのことを忘れないようにしたい
視野を広げていく際に周りとの連携をとることを考えていきたい
ミーティングで上手に話を進められるようになりたい
日頃から他係や他部署とのコミュニケーションを大切にする
一歩引いて広い視野で点在情報を収集し図書館業務に落とし込んでいく
できる範囲での協働を実現したい、まずは信頼を築いていくところから
一度自分の関わる業務について図書館としてのビジョンを確認してみたいと思う
できることはやる(半歩、一歩分くらいは確実に)ただし、無理はしない
今、行き詰っている案件に早速役立てるつもり
固定概念をなるべく持たず、前に踏み出す時に辛かったり面倒でも踏み出す
相手がどうしたいのかも大事であるが、自分がどうしたいのか、そうするとどうなるのかを考え説明できるようになりたい
「気軽に連絡を取れる人」になることで協働したい人との距離を縮めて行く
身近な人との信頼関係を作るべく日々の業務や報告を確実にすること
協働を行っていく上で前提となる自分自身の業務への理解を深める。当面は仕事を覚えること、マニュアルの整備などをしっかりとやっていく
職場全体の雰囲気良くしていきたい
「場のデザイン」を活かして企画を行いたい
地道に信頼関係を築くこととたまには反発を恐れず新しいことを取り入れる
職場の人への情報提供と自分のことから一歩ずつ
自分自身が仕事のへの姿勢を変えることで周りにも変化を与えられるようになりたい、相手の話をよく聞き意見を受け入れることから始めたい
継続する仕組みをつくっていければ
自分をオープンにしていくこと、境界線を広げていくこと
図書館側の常識を一度壊して、学生、他部署の人との協働を考えたい
普段の業務の間に図書館について考える時間を増やしたい
「協働」を進める方法には色々なやり方があるが難しい部分もあるが日常の積み重ねが重要であると感じたので日々のコミュニケーションなど細かいことから動くことを心がけていきたいと思う
頭に隙間を作ることを心がけ頑張る
とりあえず YES という
余白を持った雰囲気で気軽に雰囲気で臨む
協働のベースとなる信頼関係を作る努力

2.8 その他

- 参加してよかったという回答、感謝の意などが目立った。
- 今後の研修への希望として、形式面では、レゴのワークショップ、全国共通のイベント、異なる手法のワークショップなどが挙げられた。また、テーマ内容面では、「立場が違う人の図書館業務のやり方（非常勤と常勤など）について研修があったら受けてみたい」との回答があった。
- この企画は、企画そのものが OJT と位置づけられ、大学図書館職員自身がすべてを企画し運営するというものであった。この点について、「コクダイマルケンそのものが研修なんですね」「職員が自分たちで自分たちのための企画を立てるというのはとても意義深いこと」などのコメントが寄せられた。コクダイマルケンそのものが「協働」であり、「研修」であったことはまさに企画委員自身が感じていたことであり、受講者にも伝わったということがわかる。今後、受講者の所属大学等で同様の企画が開かれたり、類似の企画委員の応募があった際に関心をもったりするきっかけにもなったのではないかと。
- なお、「マルケンスタッフともっとからみたかった」というコメントについては、企画委員が企画運営に徹し、ワークショップなどで受講者と混じりあうことがなかったことについての指摘だと思われる。企画委員自身も今回の反省点として挙げている点であり、今後の同様の企画の際には留意したいポイントである。

その他、意見・要望・提言・今後受けてみたい研修等(自由記述)
お声がけいただきありがとうございました。機会があればいつでも呼んでください(話題提供者)
お世話になりました、参加して良かったです。
ありがとうございました、あつという間の一日で楽しかったです。
LiSA のお 2 人と話せて楽しかったです。色々ありがとうございました。
とても楽しかったし、図書館の仕事に新しい明るさを見出せました。ありがとうございました。
準備はきつと大変だったとつくづく感じます。本当にありがとうございました。
色々な人の話をきくことができるワークショップでワールドカフェ形式は良かったです。ありがとうございました。
とてもためになる研修をありがとうございました。
コクダイマルケンそのものが研修なんですね、ありがとうございました。
参加して良かったです。
机が少し狭かったです。
レゴのワークショップを受けてみたい。
全国共通のイベント
立場が違う人の図書館業務のやり方(非常勤と常勤など)について研修があったら受けてみたい。
職員が自分たちで自分たちのための企画を立てるということはとても意義深いことだと思います。
今後学内、図書館の職場でも今回のような企画のあり方は参考にさせていただきたいと思います。
マルケンスタッフともっとからみたかった。
また違う手法のワークショップ。講師の方々スタッフの方々濃い研修をありがとうございました。

以上